

## 葉集を読む

松岡 隆子

蜘蛛の囿の繕ひ難く人病めり

菅 雅子

菅さんは西東京某の会で勉強されている方だが、ご夫君が入院され暫く句会を休んでおられた。コロナ禍のなか病院では入院患者との面会は禁止されていた。面会が許された時は夫君は重篤になっておられたそうだ。

心を寄せ合つて暮らす日々の平穏は病魔によつて敢え無く崩される。壊れた蜘蛛の囿はもう繕えない。その後しばらくして訃報が届いた。同時作の〈遠雷や我が名呼ばれしかと思ふ〉も哀しい。謹んでご冥福をお祈りいたします。

夏落葉ひらりと光躲したる

岡 美穂

片蔭を歩く自づと一列に

山下なつ子

片蔭をゆづり合ふごとすれ違ふ

高橋いはを

檜や椎や樟などの常緑樹は初夏のころ新しい葉が生えはじめると古い葉が落ちてゆく。ともすれば萌え出た若葉の耀きに目を奪われがちだが、降りそそぐ光を躲しながら静かに散つてゆく落葉の風情は心に留めておきたい。夏落葉は光を躲しながらも一瞬煌めいたのかもしれない。岡さんにはその煌めきが見えたのだろう。繊細な感性である。

吹き降りの否応もなく梅雨に入る

矢作 裕子

降りしきる雨は止みそうもない。どうもこのまま梅雨に入りそうだ。これからの鬱陶しい梅雨の日々を思うと憂鬱になる。かといつて抗えるものでもない。それは巡り来る季節の中の自然現象なのであり受け入れるまでだ。人はそれぞれ否応もなく押し寄せてくるものに身を処しながら生きている。たかが梅雨、されど梅雨である。これからの長い雨期を先ずは恙なく過ごしたい。

太陽が真上にある時は日蔭はできないが、午後になると町並みや塀などの片側に日蔭ができる。炎天下、人々は片蔭に身を寄せ、片蔭を歩く。

一句目、身の幅ほどの片蔭は一人ずつ歩くしかない。何人かいれば自然に列になって歩くことになる。特に今は、密になるのを避け距離をとつて一列になって歩くこととなる。二句目の場合、狭い片蔭では対面者とすれ違おうとするとどちらか一人は日向にはみ出なければならぬ。「どうぞ、どうぞ」と、どちらからともなく譲り合つている光景はほほえましい。

どちらも対象は片蔭であるが、描かれた景は異なる。それぞれが出合ったことは各々の今日の記録である。今見たものを心に留めて、丁寧な詠んでいきたい。